

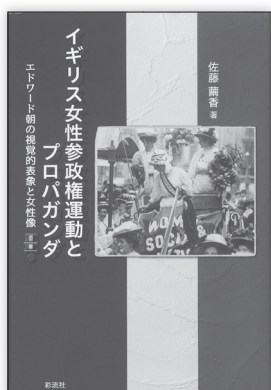
## 書評

佐藤繭香著

# 『イギリス女性参政権運動とプロパガンダ：エドワード朝の視覚的表象と女性像』

(彩流社 2017年)

金子 弥生



1918年、イギリスでは国民代表法が成立し、30歳以上の戸主または戸主の妻に選挙権が与えられた。女性参政権獲得100年を記念して、昨年、女性参政権獲得に尽力した運動家で穏健派の女性参政権協会全国同盟（NUWSS）代表、ミリセント・フォーセットの銅像がロンドン国会議事堂前の広場パーラメント・スクエアに建立された。女性では初の銅像である。これに対して、戦闘的な女性社会政治同盟（WSPU）の存在が忘れ去られてしまうのではないかと懸念を抱く人々からは、WSPU代表のエメリン・パンクハースト夫人の銅像も建立すべきだとの声も上がった。

上述からも明らかなように、これまで女性参政権運動の研究は、戦闘的な女性社会政治同盟と穏健派の女性参政権協会全国同盟の二項対立的なもので、どちらがより女性参政権獲得に貢献したかに焦点が当てられていた。だが、本書は20世紀のイギリスで展開された女性参政権運動が成果を得る1918年までの活動を考察するにあたり、そこに含まれるプロパガンダを検証することで、女性参政権の意義を多角的に分析している。

19世紀イギリスでは、男女の役割分担が明確化し、男性は外、所謂公的領域で政治や仕事に携わり、女性は私的領域である家庭を守るというものであった。「家庭の天使」という理想の女性像も確立された。こうした状況下で女性が参政権を得る、つまり公的領域に進出することは、当時の伝統的な女性の役割から逸脱することを意味した。本書は20世紀の女性参政権活動家が確立されたジェンダー規範を利用しつつ、視覚的なプロパガンダをいかに活動に取り入れたのかを、5章に分けて考察している。以下、簡単に本書を紹介する。

第1章「イギリス女性参政権運動の大衆化への試み」では、19世紀と20世紀の女性参政権運動の相違点が主に分析される。19世紀の女性参政権運動は、1866年、ジョン・スチュアート・ミルが1498名の女性の署名が記された女性参政権を求める請願書を議会に

提出した時から始まった。1867年、全国女性参政権協会（NSWS）が発足したのである。だが、「家庭の天使」という女性のあるべき姿が定着していたため、中産階級の女性が活動すること自体が難しく、大衆の心に響く活動はできなかった。また、活動参加者の目的や関心がまとまらず、運動自体が分裂してしまった。20世紀になると、女性参政権の必要性を一般大衆に訴え、女性参政権運動は広く社会に浸透していくことになる。1905年、「ミリタンシーと呼ばれる戦闘的な行為」を行い、人々の注目をひくことで女性参政権運動は大きく変化する。所謂、「サフラジスト」とは「穏健派NUWSSに関わる活動家」を、「サフラジェット」とは「ミリタンシーを行う戦闘派WSPUの女性参政権活動家」を指す。後者にとって、ジェンダー規範にとどまりながらもいかにミリタンシーという活動を展開させるかが問題となる。つまり、ミリタンシーは、「大衆を運動に巻き込み、政府へと圧力をかける」ことを目的としていた。だが、その内容が次第に激化し、ついには大衆の怒りは政府にではなく、「ミリタンシーを行なっている側」に向けられるようになっていった。そこで当時のジェンダー規範にそぐわない「不特定多数の他人の眼に自らの身体をさらす活動」を正当化するために、大衆へのプロパガンダが本格化していくことになる。

第2章「大義のための行進」では、20世紀の女性参政権運動が、19世紀の伝統を引き継ぎながら「政治的な示威行為としての労働者の行進」と「祝祭的な意味をもつ儀礼としての行進」を実施したことが分析される。女性参政権活動家は、男性的な側面を強調してイラスト化されたものが多く見られる。女らしさからの逸脱が「既存の社会秩序を崩すことにつながる」というイメージを払拭するため、女性参政権活動家は「ジェンダーから逸脱した女性たちではないと世間にアピールする」プロパガンダを使って大規模な行進を行い、行進することで、階級を超えて女性たちが女性参政権を支持することを可視化しようとした。行進はWSPU、NUWSSともに実施しているが、両者とも大衆へのアピールを考えて、各同盟のテーマカラー（WSPUは紫・白・緑、NUWSSは赤・白・緑）を効果的に用いた。NUWSSの行進では、歴史に名を遺す女性たちを再現し、彼女たちの業績と自分たちの活動の類似性を可視化することで、男性と同様のことを成し遂げる力が女性にあることを示した。その他、自分たちで作成した美しいバナーをかかげて行進し、広く大衆の興味を引くことに成功している。

第3章「思想の商品化—バザーと博覧会の融合」では、「バザー」をいかに自分たちの活動に取り入れ、大衆にアピールしていったかが考察される。「バザー」とは「東洋のバザーを模したファンシーなフェア 特に何らかの慈善または宗教的な目的のために、使い勝手がよく、装飾的な品を販売すること」である。20世紀、「消費文化の発展を象徴する言葉」でもあった「バザー」を女性参政権運動組織は活動の一つとして取り入れ、一般大衆は買い物を楽しみ、女性参政権運動組織は新メンバーを獲得する機会を得た。同時にバザーは、女性参政権という大義を大衆に知らしめる機会にもなった。バザー会場の装飾は、女性参政権組織のプロパガンダとして大きな効果を発揮する。会場は組織の色で統一され、アーツ・アンド・クラフツ運動の影響を受けたシルヴィア・パンクハーストがパネ

ルの作成、衣装や陶器などのデザインを引き受けた。バザーのオープニングには、大女優エレン・テリーが15世紀の高位の女性の衣装を身に着け登場し、女性らしさを強調するとともに、女性参政権運動活動家に対する「ヒステリックな女性たち」という非難をかかわそうとした。バザーでは活動家たちの手作りの品やオリジナル・グッズが販売され、女性参政権運動に興味のない女性たちをひきつけ、女性参政権活動家たちが普通の女性たちと変わらないことを示そうとした。その他、演劇や音楽、ダンスなどの娯楽を提供したり、サフラジエットの囚人の監獄を再現したり、投票の体験をさせるなどして、女性参政権の必要性を広めていった。

第4章「行動する女優たち—女優参政権同盟(AFL)の活動」では、女優たちが演劇を通して女性参政権を周知しようとしたことが検証される。20世紀初め、演劇をプロパガンダとして使用することは珍しかったが、AFLは「演劇という芸術を用い、女性参政権のプロパガンダを担う組織」として活躍した。「フェビアン社会主義者で左翼演劇の代表ともいえるジョージ・バーナード・ショウ」らの影響を受け、AFLの講演内容は、一幕芝居、絵画を表現するために台詞をつけた活人画や、パジェント、暗唱、演奏などを組み合わせたものであった。コメディの要素を取り入れて大衆を楽しませつつ、女性参政権獲得の意義を知らしめ、ラディカルな女性と保守的な女性の表象をバランスよく提示しようとした。その後AFLは、1914年に第一次世界大戦が勃発し、慰問団として週6、7回のコンサートを行っている。

第5章「働く女性の表象」では、階級を超えた働く女性たちがいかにプロパガンダに利用されたかが分析される。20世紀始め、中流階級女性の社会進出が進み、女性参政権運動の活動家には働く、または働いた経験のある女性が多く含まれていた。例えば、女性の事務員数は、1861年から1911年の間に400倍になったという。働く女性は職場での男女格差、仕事と家庭の両立の問題などを日常的に経験していた点で、サフラジストと言えよう。「働く」ということばは、中流階級と労働者階級の女性たちを結びつけ、「ワーキング・ウイメン」ということばが使用されるようになった。だが、彼女らの「労働」の内容は全く異なるものだった。AFLの上演した様々な演劇の中には、労働者階級の女性に自らのことばで直面する問題を語らせるものもある。一方、実際の女性たちは行進に参加し、自分たちの職を表す服装を身に着けて行進することで、観衆の注意を引きつけた者もいた。特に苦汗労働者や危険業務に携わる女性の姿は「温かい熱狂」で迎えられた。こうした労働者階級の働く女性たちは、「中産階級の女性規範から逸脱した『他者』」であり、改善されなければならない存在なのである。そこで、女性参政権組織は同情をひきやすい労働者階級の女性を表象として利用し、行進に関心を寄せる人々を女性参政権運動に引き込もうとしたのだった。1906年にロンドンで開催された「苦汗産業博覧会」は大きな反響を呼んだ。働く労働者階級女性の苦難は、美化され、ポスターなどが作成された。しかし、1914年に第一次世界大戦が勃発すると、女性参政権活動家たちは活動を中止し、戦地に赴く男性に代わって働いて国家へ貢献することになった。

「おわりに」では、活動を休止した女性たちが軍需工場で働き国家に貢献したことが評価され、戦後の1918年、国民代表法で制限付きではあったが、女性たちは選挙権を獲得したことが述べられている。

本書は、津田塾大学に提出した博士論文に加筆、修正したものである。これまで女性参政権運動史を研究する研究者は多かった。リサ・ティックナーは初めて視覚的プロパガンダに注目し、行進とポスターに注目して研究したが、そこでは扱われなかった演劇、バザーをジェンダー的視点も含めて綿密に考察したのは本研究が初めてではないだろうか。今後は、「イギリス帝国内での女性たちの連携や宗教的なグループに基づいた女性参政権組織など、参政権運動では、まだまだ明らかにされていない」点についても研究を進めていくという。今後の研究が待たれるところである。

(かねこ やよい 文学研究科英米文学専攻教授)